



TITLE:

京大広報 No. 184

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 184. 京大広報 1979, 184: 993-906

ISSUE DATE:

1979-10-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209504>

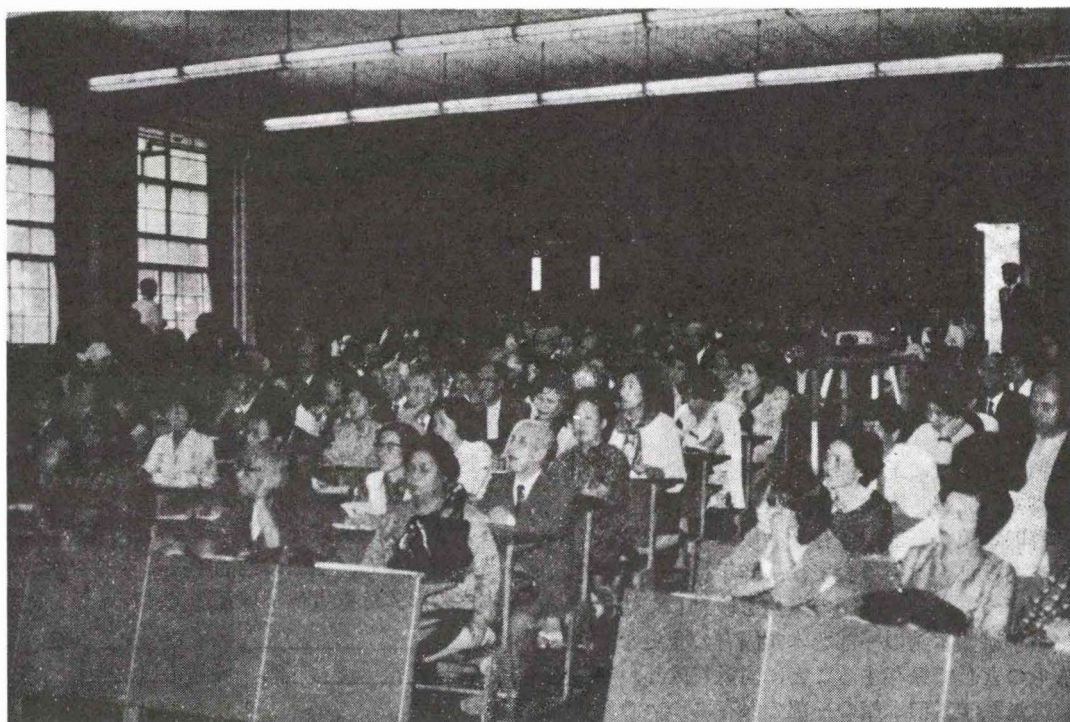
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 184

京都大学広報委員会



「京都大学市民講座」を聴講する人たち（10月6日 法経7番教室）

今回の「京都大学市民講座」は、10月6日、13日、27日の3日にわたり、「人間を考える」をテーマに、人文・社会および自然の諸科学の領域にわたる講義が予定されている。

目 次

原子炉実験所をめぐる問題について	計報・日誌..... 3
総長 岡本 道雄..... 2	<随想>
歴史的建築物保存調査専門委員会	回想断片 二つの世界大戦のはざま
第5次報告について..... 2	名誉教授 松本 信一..... 4
第2回京都サマー・インスティテュート	
「低次元系の物理」..... 3	

原子炉実験所をめぐる問題について

総長 岡 本 道 雄

最近、本学原子炉実験所の安全性について種々論議されているが、ここに総長の基本的な考えを表明しておきたい。

原子炉による研究は科学研究の広い分野に関連し、重要な位置を占めている。本学原子炉実験所はその基礎的研究を行なう全国共同利用施設として設立されたものである。

言うまでもなく、この際最も重要なのは、原子炉の安全性の問題であって、そもそも原子力開発に関する過去約25年余の論議の一つの中心はこの安全性をめぐる問題であった。この点我々は今度のスリーマイル島の事故を、改めて原子力研究開発への警鐘として受けとり、常に原子炉による研究の安全性については叡智の限りを尽さねばならないと考えている。

歴史的建築物保存調査専門委員会 第5次報告について

歴史的建築物保存調査専門委員会

昭和53年6月に工学部長から本委員会へ、電気系学科の研究室、実験室の新営計画に関連して、同学科旧本館の一部の保存と活用について審議の依頼があった。本委員会では、昨年12月と本年9月の両度の委員会で上記の案件を検討した結果、電気系学科旧本館の一部を本学固有の歴史を記念するものとして保存することに同意賛成し、そして、電気系学科旧本館の一部の保存について委員会の所見をまとめ建築委員会委員長へ報告した。去る9月25日に開催された建築委員会で上記の当委員会所見（第5次報告）が付議され承認されている。

本委員会第5次報告によれば、電気系学科旧本館（一部）の保存についての委員会所見の要旨は次のとおりである。

工学部電気工学科は明治30年に本学の創立と同時に創設されており、その建物は明治32年と同35年の両度に造立された本館、大正3年に造立し、同10年に増築した実験棟から成る。なお、本館は大正10年に二階建に大きく拡張増築された。その後昭和36年に電気工学第二学科が新設され、新館の建設に際して上記本館の一部が撤去されたが、

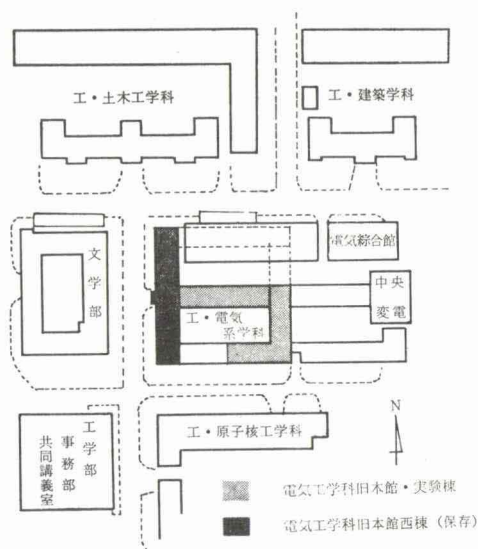
本学原子炉実験所としても、その創設時の困難な経緯を身にしみて感じつつ出発していることもあって、この安全性については自ら重要な研究課題としており、安全管理には十全の努力を傾注してきた。同時に、周囲の住民に対しても審議会その他地元の自治体諸組織を通じ、その理解と納得が得られるよう努めてきた。

今回の排水中における放射性物質の存在の問題についても、実験所としては従来より十分注意してきた重要な問題であるだけに、確実な資料と冷静な判断で対処し、安全性の確保については能う限りの努力を払っていると信じている。

総長としては、本学の総括的な責任者として、原子炉実験所のこのような努力を信頼しつつも注意深く見守り、今後一層の努力を続けるよう期待すると共に、専門的判断を要する具体的措置については、原子炉実験所の判断に委ねなければならないと考えている。

のこる本館と実験棟はなお持続して現在にいたっている。

電気工学科旧本館は創建当初には煉瓦造平家建のロの字形平面から成り、中央に中庭がつくられていた。大正3年に中庭を南北に二分して東西行に煉瓦造平家建の実験棟が本館西棟に接続して造立され、大正10年に東へ拡張して本館東棟に接続された。また、大正10年に既存の本館をすべて二階建に増築し、西棟の西面中央に玄関を設けた。本館の形式は壁主体が煉瓦造で、床・天井そして



本部構内東北部建物配置略図

屋根小屋組を木造とし、屋根は寄棟造桧瓦葺につくる。同じ形式の建築は本部構内西南に所在する旧物理学科、数学科教室（現在、保健管理センター、学生部）と共通している。

本学が理工科大学として創立された当初には旧第三高等中学校の施設を移管継承して出発し、逐次新・増築して充実された。電気工学科は本部構内東部北寄に所在し、その建物は上記の本館が最初に新築された。この理工科大学創設時に造立された諸学科本館のうち、電気工学科本館が今日では工学部関係で現存する唯一の遺構である。

この電気工学科旧本館が所在する附近には土木工学科本館（煉瓦造二階建、大正6年造立）が所在し、両者がならびたつ光景は本部構内でもきわ

立った歴史的景観を形成している。

このように、電気工学科旧本館は電気系学科の創設以来の歴史と由緒を今になお伝える貴重な遺産であり、また、工学部そして本学の創立以来の歴史を記念する建築であるとも言える。既に、旧本館の北棟が撤去され、最近にはイオン工学実験施設の新営にともない南棟の一部が撤去された。本部構内の限定された用地の有効利用ならびに老朽化した建物の更新要求にせまられ、歴史的建築の保存には弾力的な対応が望まれている。電気工学科旧本館の残る部分のうち、西棟は玄関車寄を付属し、本館の正面棟としての体裁と風格をそなえており、本学固有の歴史を記念する建築として保存に値するものと判断される。

<部局の動き>

第2回京都サマー・インスティテュート 「低次元系の物理」

基礎物理学研究所では、9月8日から12日まで、数理解析研究所大講義室および基礎物理学研究所の2会場において、「低次元系の物理」を主題とする京都サマー・インスティテュートを開催した。これは、素粒子物理学について昨年開かれた第1回に引き続く、第2回京都サマー・インスティテュートである。

国内から70名、国外から14名（米国8名、中国2名、スウェーデン、ソ連邦、イスラエル、ブラジル各1名）の物理学者が参加し、講演と活発な討論が行なわれた。主な講演題目と講演者は次のとおりである。

一次元における多体問題

米国 Brookhaven 国立研究所
V. J. Emery

二次元における融解、液晶および超流動の理論

米国 Harvard 大学 B. I. Halperin

半導体界面における準二次元電子系

米国 California 大学 San Diego 分校
L. J. Sham

二次元における不規則平面回転子模型

米国 Chicago 大学 J. V. José

液体ヘリウム上の二次元ウィグナー結晶

ソ連邦固体物理学研究所 V. B. Shikin

二次元XY模型の相転移

東京大学理学部 鈴木 増雄

二次元ウィグナー結晶

東京大学物性研究所 福山 秀敏
(基礎物理学研究所)

訃 報

石原藤次郎（本学名誉教授・工学博士）

10月2日逝去、71歳。本学工学部卒。昭和18年本学工学部教授就任、同47年退官、その間評議員（昭和25年～

27年）、工学部長（昭和34年～36年）、防災研究所長（昭和38年～40年）ならびに昭和41年～43年）、大型計算機センター長（昭和44年～47年）を歴任。昭和53年勲二等旭日重光章受章。専門は河川工学、水文学、海岸工学。

日 誌

(1979年9月1日～9月30日)

9月5日 大韓民国 韓国ユネスコ国内委員会委員 Hee Chae Chung 氏および同委員会監事 Young Byoung Kim 氏来学、総長および関係教官と懇談
8日 基礎物理学研究所京都サマー・インスティテュート（12日まで）
" OECD（経済協力開発機構）CERI（教育研究革新センター）家庭教育プロジェクト担当部長 Beresford Hayward 氏来学、関係教官と懇談
10日 附属図書館商議会
12日 同問題委員会

12日 アメリカ合衆国 Michigan 州立大学教授 Warren Cohen 氏来学、関係教官と懇談
18日 安全委員会
19日 国際交流委員会
25日 評議会
" 建築委員会
" 中華人民共和国 中国科学院代表团団長（中国科学院学部責任者）顧徳欽氏外4名来学、総長および関係教官と懇談ならびに学内施設見学
28日 学位授与式
29日 ドイツ連邦共和国 Bonn 大学教授 Erich E. Geissler 氏来学、関係教官と懇談

